

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

●東京外国語大学総合国際学研究科国際協力専攻

「平和構築・紛争予防修士英語プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

従来の平和構築・紛争予防専修コースにおける社会科学論の教育体制拡充を目的とし、任期付き教員ならびに非常勤講師を採用し、“State and Conflict”, “Economic Development and Peacebuilding”を開講。同時に“Peace Advertisement”“Conflict Prevention and Global Security”は日本独自の紛争予防学、平和構築学の特徴を出すために開設した。これらにより、PCS コースにおける教育体制において、理論面および実務教育面両面での改善・充実を図った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・本コースの特徴は、多様なバックグラウンド（出身国、宗教、教育歴等）を持つ学生が集まっていることにあり、そのため、学生個々の知識を相対化しつつ、専門性を深めることに力点をおくよう配慮した。
- ・カリキュラムに関しては、毎年度末に学生向けのアンケートを行い、ニーズの高い授業を優先させた。また学生が無記名で、自由に記載できるようアンケート回収の為の特別なメールアドレスを設定し、提出者を特定できないようにする配慮も行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

多様な留学生に対応したカリキュラムの拡充により、学生の基礎学力、学業への取り組む姿勢が強化され、学生が積極的に論文発表を行う等、研究の質的向上が見られた。とりわけ紛争当事国出身の留学生に対する教育体制を充実させたことで、本学の国際的教育水準の高さを認知せしめることとなり、入試の際には、応募にはいたらないまでも多くの問い合わせを海外の教育機関や学生個人から受けるようになった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

●東京外国語大学総合国際学研究所国際協力専攻

「平和構築・紛争予防修士英語プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本 PCS コースでは英語で授業を行っており、論文も英語で執筆する。論文作成支援として、“Thesis Guidance”という授業を分野別に開設、学生は自分の研究テーマにそって履修する “Thesis Guidance”を選択できるカリキュラムを提供。指導教員とともに複数教員による論文指導体制が可能となった。

- ・論文執筆だけではなく、論文発表能力向上を目指し、英語ネイティブの外部講師を招き“Presentation Workshop”を開催し、実際のプレゼンテーションを行い、指導を仰いだ。
- ・論文発表の場を提供すべく広島大学との「論文合同評価会」を開催。両大学の教員の指導のもと、それぞれの大学の学生による研究発表と討議を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・英語圏・非英語圏からの学生間に見られる英語能力の差に考慮し、画一的な授業ではなく、学生個人のニーズに合わせた授業を展開するよう工夫を凝らした。
- ・「書く」ことを苦手とする学生向けに博士後期課程の学生および同じ修士課程の学生による勉強会を開き、学術論文の書き方などについてピアティーチング方式による補習を行った。
- ・複数の教員により論文指導が行われることになるため、異なる指導法により学生が混乱しないよう、指導教員と授業担当教員との間で十分なコミュニケーションをとるよう心がけた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

カリキュラムの拡充とともに、論文執筆支援に力を注いだことにより、学生による論文発表および学内外の研究会における研究報告の件数が増加した。また他大学との論文合同評価会は、学生にとっては鍛錬の場となり、教員および学生から得られた率直な意見や指摘を修士論文に反映させるなど論文の内容向上にも役立っている。これらの経験は学生にとっては大きな自信となっており、本コースを修了し博士後期課程に進学した学生がその後海外でも著名な国際学会で複数回研究発表を行うなど、海外における本学の認知度向上にもつながっている。